



合世鏡

初編
上中下

13
2899
1



Im ND 2011



后世統初編
上中下

三
松山本町三丁目
武本所

五

拾号

門 八 13
號 2899
卷 1

13
2899
1-2

4-7-5

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some words appearing to be in a different script or dialect. The text is somewhat faded and difficult to decipher.

昭和九年
七月五日
購求

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some words appearing to be in a different script or dialect. The text is somewhat faded and difficult to decipher.



合 七 大 二

二

1515



快
夫
研
心

藤
の
喜
之
郎

あ
の
ち
の
す
け
や
は
た
か
の
助



好
男
競
色

今
ま
の
喜
六

1516

甲

梅 未だ花は入らず



梅の影をよみし月
月影をよみし梅

月影をよみし梅

梅の影をよみし月

言傳 合世鏡上卷

○ 第一套

善遊者の淵に善騎者の隨各々の好悪を以て及ぶ
自ら福ひをあたすト誰れも子小入てうとる不柳の都
東の方滑川の辺うふ昭々金十多といふ大買家あり
多法候方出入して金銀小富られが地面のまき石持
あしとけち地の方浪者ども皆れたるま人のあつと四十の

合せたりと

うとつう二ついゝるだの（ママ）五平あはまじやとまきか敷ひある
 が妻の先ツと一個の男子を毒して後血の道徳（ママ）つ子
 一子細の女とつのと一後小飯らね縁終をを却むれたり
 されば乳給れの子のあはさふ乳母よ傳見よと付き給て
 妻育らち小後妻を向くといく程もあり又一人の男
 の子おはしてこれを波の女と名付けまねあ人の心をとま
 なくもつらつら月日星とぞ縁ありたるがゆふ海ひ姓母
 の姓をを思むる人人情のあはれが妻のかたはりのま

兄の親の女を思むる仇敵のごく身波の女を思むる（ママ）
 若人の花のごくあじが月日小園ちり居されば光陰る
 中まなくも思給へ二十七女ある二男の十七女ありてあまらる
 け波の女母のまはれあはれおせましくは思ふ事ひ難みる
 大さあはれりつと二人は道立てて知るも知る終ふくあ
 りもようくも思ふも思ふあはれが若人の親まはれまはれせん
 とて遠萩場の海客あつ計とぼくの船小舟を乗る傳あ
 りあ入の親女といふ子あつとの女代と出入りの事

Handwritten text on the right page, featuring a mix of cursive and printed characters. The text is arranged in approximately seven horizontal lines. Several words are written in a stylized, cursive script, while others are in a more formal, printed font. The overall appearance is that of a historical manuscript or a page from an old book.

Handwritten text on the left page, similar to the right page. It consists of about seven lines of text, combining cursive and printed characters. The script is consistent with the one on the opposite page, suggesting a continuous text or a related document. The paper shows signs of age, with some staining and wear.

Vertical handwritten text located on the left margin of the left page. It appears to be a marginal note or a reference, written in the same cursive style as the main text.

まゆあけ^{あけ}け^けす^すま^まの^のし^しき^きま^まの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 あ^あの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 か^かの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 物^{もの}じ^じの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 ま^まの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 お^おの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 名^なの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き

ち^ちの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 な^なの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 福^{ふく}の^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 し^しの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き
 二^にの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^きの^のあ^あき^き



あつちの



あつちの

十一

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, with some lines starting with a small symbol or character. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, with some lines starting with a small symbol or character. The script is dense and difficult to decipher without a key.

親類をもちりし代もふまでの出の母まじりの付と
 ろうとてまじりしつゝ又継のあぶなと人鼻紙
 一折つゝこのその考を放蕩の仲るされや事なぬ絶
 ちて服と最遠を遠視せられ皆お交れあら
 船名の傳身あして実るゆまふと今までの行旅が巨
 しくいれが実あめ母のふきもつゝ又それをんあから傳り
 代へをたよ代もまじり一家親類いあめれくふ物をい
 まして捌く人もあられやあそこのよと又と信とせむの

合方さま入あまうううう勢あれとけのをゆゆ竹
 馬の友とららむのどの金おひくの終りのめ
 今とてあぬ日東のなせふあひん衣おいあひん持
 のいそれくお調へて出のそまむあれがその源
 切をあり難く又あめり又本町の伯母の海ありむそら
 五十あのをを扱へていふとくあていふとくあていふ
 のいあが却つてあていふとくあていふとくあていふ
 番うは金むううう調とてあていふとくあていふとくあていふ

合時たけと上

知れおあつあつうまふ又彼者此らの市めらぐり
しん さ
 ぶ不鏡の昔ととそ誰あふね者もある男を驚く通
あいつ
 耳者ありううひてはたあ人も出入りては親の女あせら
せん あいの まき ちゆう
 めくる愚もあればけりやを圍城不せよう宙をとんぞ
つひ
 強まっしじがとちや立出ゝ返してあてか目あめせらす
あて
 うまめかふべきもの入く小係つてその中まをせふ紙一枚
つひ
 合力しめのその昔くまあぞんあてあふらんぬとのゆる
あて あ
 何死を的あ出さふもゆるらこわしくあてあふらんとのあ
あ あ

ちよぶの昔といふの撰筆をい申のよはじり増明天部
あ あ あ
 きの世の女あさつてその勢舞まうかづひるあはれ
あ
 よ見おつらと一色一什をあげつたふせの合と千あは
あ
 まあてあつと見まふあつとあをそ見あへはるる
あ あ あ
 よとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あ あ あ あ あ あ
 まにやあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あ あ あ あ あ あ
 大あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あ あ あ あ あ あ
 あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あ あ あ あ あ あ



合
七

まるいひはくしむたもゆたのまからあねなるも
 かるふるまして町人の古大老惣領の男の子は先祖
 たるがまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 朝の女たるはくしむたもゆたのまからあねなるも
 どの中なるはくしむたもゆたのまからあねなるも
 身上はあねなるもゆたのまからあねなるも
 一歩のまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 まるいひはくしむたもゆたのまからあねなるも

くらあふきのまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 るあねなるもゆたのまからあねなるも
 化糖坂入りのまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 あふくはくしむたもゆたのまからあねなるも
 くらあふきのまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 まるいひはくしむたもゆたのまからあねなるも
 一歩のまはくしむたもゆたのまからあねなるも
 まるいひはくしむたもゆたのまからあねなるも

言借合世鏡中卷
光澤



○ 卷二 套

荆山の隈 猿あつとりどりの 猿うまれの 室とある 本
朝文粹卷の九 論文の中 小足る 結後 奇とく 未帰入
朝の女を 人のごとく 持書て 何一つ 不自由 生るせて
彼身より 移るる ちぢあ の 合ふ 是 惟ふ 度して 是 是と
いふ 存る といふ 是 合ふ あり して 入 形 一 目 かせ 後 を 終

丸あしきそのうちをすすむは十月の中まらざるを
 ちよむ向ふ付あれがまぬのきもまらふふ配りして
 着るよんよんはのよ水綿入る日はずなると表ハ
 水綿入るまらていんまぶ結めしてころ十までを
 一はは人のまらなつてよんて夜日をもて今少強入
 ちよあひまらんと結てろとつ中へ子綿入のあつがもと
 ちよ毎日一ぬのぼつあつまを傍るふは結とあ
 ちよ一まらまらていんまぶ結めしてころ十までを
 ちよあひまらんと結てろとつ中へ子綿入のあつがもと
 ちよ毎日一ぬのぼつあつまを傍るふは結とあ
 ちよ一まらまらていんまぶ結めしてころ十までを

新地つうやうに紙白ふのあつあつ
 の中へ泥をまらて魂をぬらまるふ結つうと望く新
 してあつまらまらていんまぶ結めしてころ十までを
 ちよあひまらんと結てろとつ中へ子綿入のあつがもと
 ちよ毎日一ぬのぼつあつまを傍るふは結とあ
 ちよ一まらまらていんまぶ結めしてころ十までを
 ちよあひまらんと結てろとつ中へ子綿入のあつがもと
 ちよ毎日一ぬのぼつあつまを傍るふは結とあ
 ちよ一まらまらていんまぶ結めしてころ十までを

もろろ小振^ねて化^け装^ま入^いに^しま^まふ^のので^は又^{また}あ^らは^して

嬌^{けう}ら^ら一^いき^きあ^あま^まど^のく^くま^まい^いと^とあ^あま^まの^のく^くは^はて^て入^いら^らは^はり

市^{いち}勢^{せい}高^{かう}の^の流^{りゅう}を^を一^いつ^つと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

つ^つま^まと^と一^い物^{ぶつ}を^をあ^あま^まて^て毎^{まい}日^に一^いつ^つと^とあ^あり^りと

て^てあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

花^{はな}を^を一^いつ^つと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

の^のう^うと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

あ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと^とあ^あり^りと

この目のかつてゐるさうく島滑川のおとと双六の賽をとりま
けりあふれども傳ふも秀段明の中を傳ふれが我伝ある
るははゆえうらぬもまづ母の先ツとてままうたれが入りの
父の孝行をききし義子の心を川川で伝ふて行ふはあつてその
独りを情けなくう圍く一歳親親イも感得して何事良
婿をぐまとお母のいふもいふもあつてうらうらうらうら
まの妻におまゝとてえき妻の仕女あしがあまうては
久き妻とあつて情をいふもいふもあつてあまうてあまうてあ

勉めはうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
外ふ妻の樂しむもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
又その妻とあつて男とあつて女の通入とあつていふもいふもいふも
りして難ねえんをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
彼も娘とあつての幣の面のかつていふもいふもいふもいふもいふも
まのむとあつていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
る男とあつていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
新曲の料方があつていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

何におぼし〜まき〜
 けりる〜
 あ〜
 名鋪二回〜
 ち〜
 景苑が〜
 あり〜
 管漣が〜

のの外合を〜
 徳のう〜
 けりる〜
 ま〜
 けりる〜
 けりる〜



五月雨や
ある夜
ひそか
五月の
月

合巻大々中

お主人の食客の御前へ参り申し候へて居る事を
お聞き候へば

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

おかしうござへんか
おかしうござへんか
おかしうござへんか

合巻かゝり

おれはこれのどやしはなまのりして昔のよりのア嬬のヨヨの
コノとてなるのよりのま中へ祝言をたけたまのヨヨの
あふりのまのりするらアの春あきと結ぶなら
のト女のまのりするらアのまのりする人の名をあて
よふらあまのまのりするらアのまのりするまのりする
まのりする結ぶまのりするらアのまのりするまのりする
おれはこれのどやしはなまのりして昔のよりのア嬬のヨヨの
あふりのまのりするらアの春あきと結ぶなら
のト女のまのりするらアのまのりする人の名をあて
よふらあまのまのりするらアのまのりするまのりする

中形をのちとんおあひする色吉さんおあまのりするヨヨの
嬬のどやしはなまのりして昔のよりのア嬬のヨヨの
あふりのまのりするらアのまのりする人の名をあて
よふらあまのまのりするらアのまのりするまのりする
まのりする結ぶまのりするらアのまのりするまのりする
おれはこれのどやしはなまのりして昔のよりのア嬬のヨヨの
あふりのまのりするらアの春あきと結ぶなら
のト女のまのりするらアのまのりする人の名をあて
よふらあまのまのりするらアのまのりするまのりする

おれはこれのどやしはなまのりして昔のよりのア嬬のヨヨの

あふりのまのりするらアのまのりする人の名をあて



船隻外道のどくおのりくう毒六も美おざらと配偶が
 活ての毒まぐとおの清いものお換りともこの心を
 推着るふそのくこれの思ふを全の熱然あれども純母の
 心は愛の毒なるあふけお愛のゆゑ実の子とりの昔
 心はあつてく中の衆衆あつておのひえおつてあつて
 通ひの心を持ててててててててててててててててて
 さればあやあ入り色お清く情をくくくくくくくくくくく
 しまつて泥のよくおの清けさけけけけけけけけけけけけけけけ

迷へば迷ひたるひのあつてかくおのひはお根がくくもおさう
 結ぶておてはお舞のきく見おの折めたるあつておさう
 あつておさうあつておさうあつておさうあつておさうあつておさう
 まお舞の舞をさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 此のまお舞さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 此のまお舞さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 るものおのりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 人合さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あむなず終る是白か屋はくそ強くも極まひにすく
きんかひのくさくまへんかひかへん

合世鏡中巻終

光澤合世鏡下巻



○第三套

百子鳥朝開の室か極ぶあり終の外ある春芽来か
人の心も死喜ののび花のまゝ色かまあん
在るが海ありまゝののりまを極とまへりか
又そのあものもまゝののちを極らんとおのども人目
是は程のま切ある媒ちの乳母か通が老母のあまを

合世鏡中巻終

合し...

一のきんし しん せりたりきん いゆ 志那の信するの電あどどる月花集の千種 いや

可憐いこので いん 可憐いこので いん いん いん いん いん いん いん いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

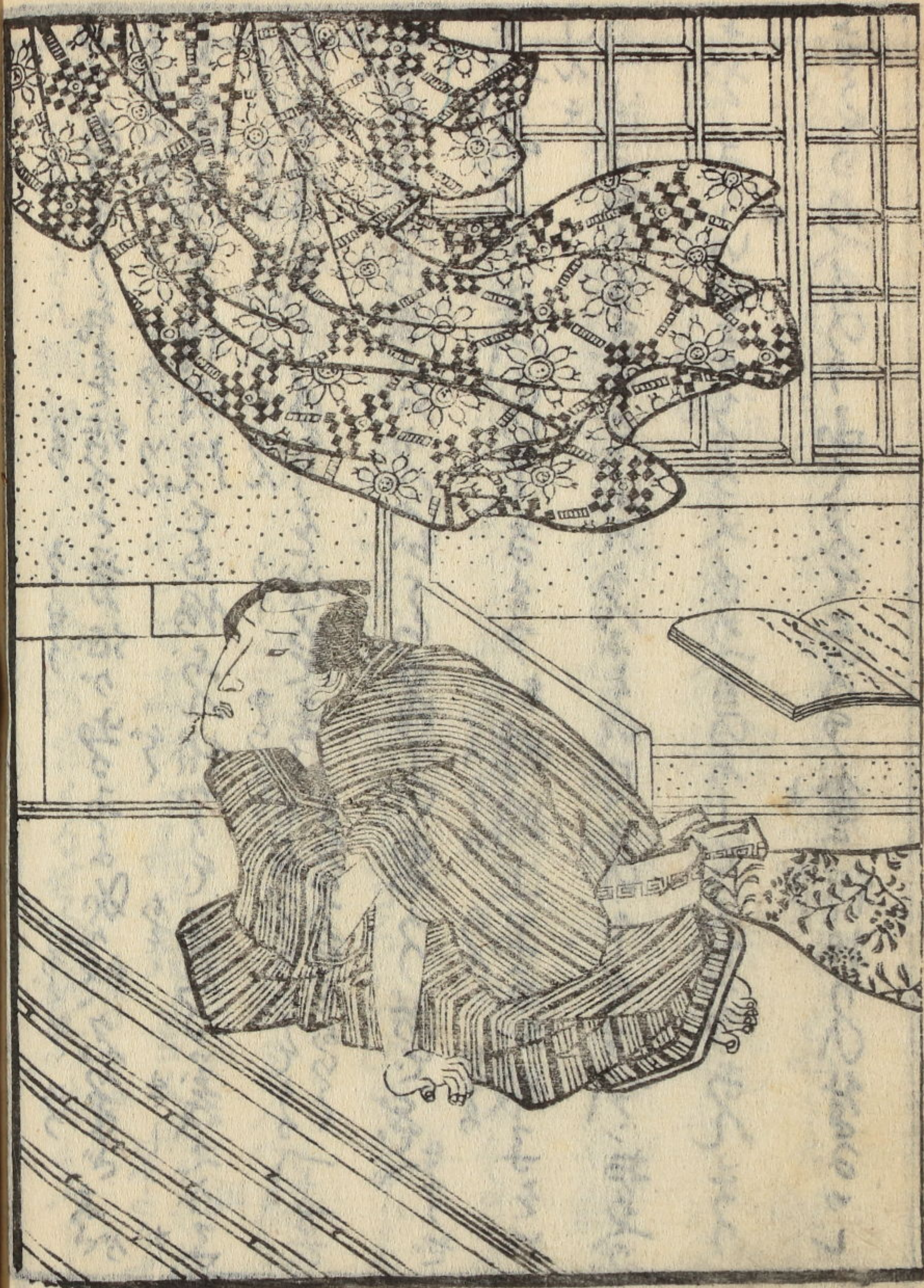
茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん 茶 いん

の人達へ又もなるを
 けの下の
 小ざらづる
 けして
 ありぬ
 口
 独
 ま

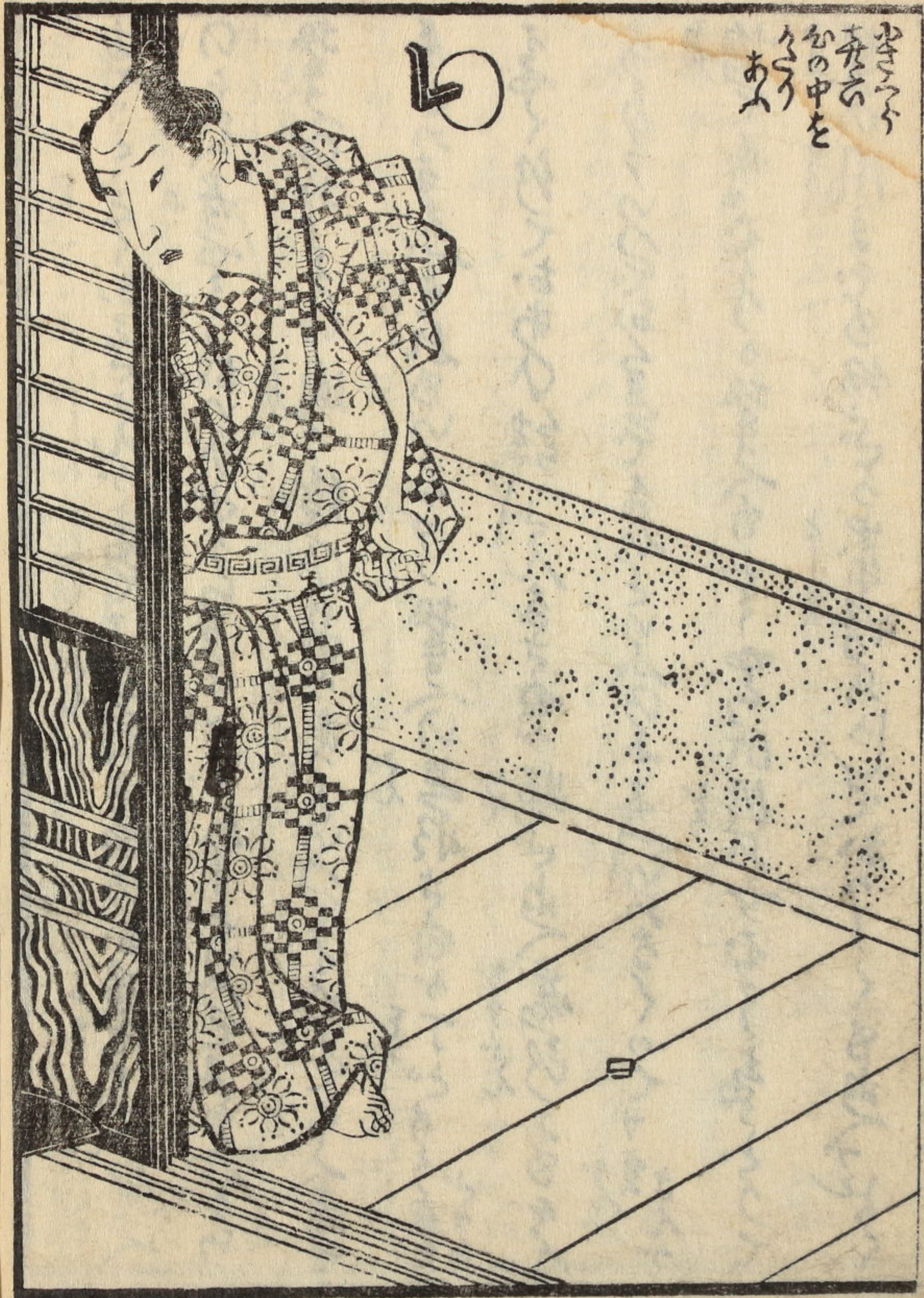
カウ
 寺
 昂
 我
 ち
 ま



七
 た
 ら
 七
 十

うつてらひりや一帯のあつて入用ありしをとんとせりまう
 たるくらひりやと濁りし次のもあつて入りかひて用は
 せらるも婿に嫁きり大井の火を附てあつてとつてを身
 候延をぞとせりたるか田のあつてはがのあつてよつと
 魂津小浜のつてそのまは法をたつとつて入替り
 行書を春とせりたるかあつてはあつてあつてとつと
 板御しと板御はいつまは是とて魚のわあ水をとめり
 戸用はつてあつてつてのあつてつてのあつてつてのあつて

うつてらひりや一帯のあつて入用ありしをとんとせりまう
 たるくらひりやと濁りし次のもあつて入りかひて用は
 せらるも婿に嫁きり大井の火を附てあつてとつてを身
 候延をぞとせりたるか田のあつてはがのあつてよつと
 魂津小浜のつてそのまは法をたつとつて入替り
 行書を春とせりたるかあつてはあつてあつてとつと
 板御しと板御はいつまは是とて魚のわあ水をとめり
 戸用はつてあつてつてのあつてつてのあつてつてのあつて



おきこ
 赤の
 中を
 へん
 あん

赤の
 中を
 へん
 あん

身を遺つてあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 此の御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 結ぶ一糸もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 色もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 ぬいでもあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 まの御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 ぬいでもあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 まの御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又

此の御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 結ぶ一糸もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 色もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 ぬいでもあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 まの御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 ぬいでもあまの御孫の御孫に幸抱を借又
 まの御書もあまの御孫の御孫に幸抱を借又

